魔法少女リリカルなのは　神様による狼と兎の遊び

エドゥアルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　神様による狼と兎の遊び

【Ｎコード】
Ｎ９３３１Ｖ

【作者名】
エドゥアルト

【あらすじ】
神の戯れから始まる一つの遊び。
巻き込まれた７人は、舞台、道具、役を与えられた。
かくして、脚本の無い劇が始まる。

プロローグ　簡単なルール説明（前書き）

不定期更新です。

プロローグ　簡単なルール説明

気がつけば白い空間に浮いていた。
僕は自室で寝ていたはずだし、当然ながらこんな場所に見覚えはない。
変な場所だ。
この場所には終わりが無い。
見渡す限りどこまでも白い空間が続いている。前後左右、上はもちろん下も床があるわけでもなくどこまでも続いている。
まるで宇宙空間のようだ。
当然ながらこんな場所が存在するわけも無く、僕はごく自然な成り行きで夢なじゃないかと思った。
そんなことを考えていると、僕の頭に声が響いた。
「ようやく皆、目が覚めたのか？」
聞こえてきたのは不思議な声で、老人にも子供にも、男にも女にも聞こえる声だった。
あたりを見渡しても声の主は見えない。
「今回君らを集めたのは、一つゲームをしてもらうためだ」
「ゲーム？」
答えたのは僕じゃなく、若い男性の声だった。
その声の主も、どこにも見えない。
「そう、ゲーム。ルールは簡単。プレイヤーは狼と兎に分かれて貰う。狼は期日までに生き延びて、その時点で兎が死んでいれば合格。兎は期日まで生き延びて、その時点で狼が死んでいれば合格。わかりやすいだろ？」
確かに単純で分かりやすい。
けど、
「くだらないな、誰がそんなものに参加するか」

聞こえてきたのは、また別の男性の声だった。
また、声の主は見えない。
僕は不可解な状況に混乱しながらも、心の中で2番目の男の声に同調した。
何が楽しくてそんなゲームに参加しなくちゃいけないんだ。
それに、死ぬとか生き延びるとか、現実味が無さ過ぎる。
「い～や、参加は強制だ。ルールの説明を続けるぞ。プレイヤーは全部で7人。チーム比率、狼と兎の人選、舞台はくじ引きな」
最初の声は意見なんて聞かないとばかりに話を進めていく。
「待てよ、参加なんてするわけ無いだろ！！　何なんだよお前！！
何がしたいんだよ！！」
また、別の声。男だ。
今回も声の主は見えないが、激しく憤っている事が声だけでも伝わってきた。
「うるせぇなぁ、参加は強制だって言ってんだろ。それにお前たちにとっても悪い話じゃない。生き残ったら、何でも一つ願いを叶えよう」
何だって？
「なんでも一つ？」
僕は思わず声に出した。
「あぁ、何だっていい。世界征服がしたい、不老不死になりたい、死んだものを蘇らせたい、人生をやり直したい。どんなことだってかまわない」
その言葉に息を呑む。
だってそうだろ？　何だって願いを叶えてくれるなんて、さっきのゲームよりも現実味が無い。まして、不老不死、死者蘇生、転生なんてそんなことできるわけが無い。
けど、混乱する頭の中でも冷静な部分が語りかける。
この白い空間は？　見えないのに聞こえる頭の中の声は？
どれも普通の人には出来ない。

もしかしたら、本当にどんな願いも叶うかもしれない。
そうだとしたら、僕は
「あんた、何者なの？」
僕の思考をさえぎるようにして、女性の声が響いた。
そして最初の声は
「お前らの言葉で言うと、神だ」
そう、答えた。

気づけば、あたりに静寂が満ちていた。
誰もが自分の中で答えを出しているのだろう。
僕もメリットとデメリット、うまくいけば願いがかなうが、下手をすれば死ぬ。
いったいどうするべきか、とまじめに考えている自分がいた。
普通に考えれば胡散臭い話しだし、到底信じられないことだが、それでも信じてみようと気になったのは、やはり「願いが叶う」の一言のせいだろう。
それほどまでに、魅力的なものだった。
「話を聞く気になったか？　それじゃ、まずクジを引いてもらおう。最初に起きた3人に一つずつ引いてもらうぞ」
さっきの話から全部で7人のはずなので、クジが来る可能性は半々ぐらいのはずだが、僕のところには何も来ない。
どうやら、起きるのが遅かったようだ。
「決まったぞ。映像を送るから見てみろ」
その声が響くと同時に僕の視界に文字が浮かんできた。

『狼：兎　1：6

舞台：魔法少女リリカルなのは
あなたは狼です』

これは――――！！
「どうもバランスが悪いがこれで決定な。最後の列がお前たちの陣営だ」
嘘だろ、僕が……狼
しかし、僕の動揺にかまわず、話は進められていく
「細かい説明行くぞ。向こうでのお前らの体は初期段階で3歳。スタート地点は全員バラバラだが、時間は一緒、主人公が生まれた日がスタート。家族構成は親との3人暮らしだが、二人とも家に帰ってこずにお金だけが振り込まれてるって設定な。デバイスは全員初期から所持させる。これは地球、ミッドにかかわらずだ。期日はJS事件解決から半年後までだ。ここまでで何か質問は？」
「三ついいか？」
2番目の男の声が聞こえる
「なんだ？」
「一つ、金は全員同じ金額が支払われるのか？　二つ、デバイスは全員に同じものが配られるのか？　三つ、期日までにどちらも生き残っていたらどうなるか？」
男の疑問はもっともだった。
普段なら僕でも気づけたはずなのに、今回はまったく気づかなかった。
クソっ！！　動揺しちゃだめだ！！　冷静にならないと。
「金は全員同じだ。デバイスに関しては性能は均等になるようにするけど、種類は本人の希望を聞くぞ。後の細かい設定は自分でしてくれ。期日までに決着がつかなかったら、どちらもその時点で死んでもらう、もちろん願いは無しだ。これでいいか？」

「あぁ、続けてくれ」
「向こうに行くにあたって特典をつける。これはポイント制で、強い能力なら高いポイントが必要で、弱い能力なら低いポイントでいい。数はポイントが続くまで何個でもかまわない」
「ポイントってのは皆同じなのか？」
３番目の男の声だ。
「いや、ポイントはそれぞれ違う。生前のスペック、才能、人間関係、悪行、善行なんかがポイントに変換される。まぁ、狼だけは少しだけ上乗せするがな」
これは嬉しい情報だ。ポイントが高ければより強い能力を得られる。
「さて、最後に願い事だが……一つのチームに一つの願いな。」
「「「「！！」」」」
「さて、以上だ。個別の設定に行くぞ」

……
……
……これは、
「思ったより格段にハードルが下がったな」
「どうしてそう思う？　アンラッキーボーイ」
「……これ、ほかの人には通じてないんですよね？」
「もちろんだ」
なら安心だ。
「簡単ですよ。皆、自分の願いを叶えたいのに叶う願いがチームで一つだけなら、確実に仲間割れが起きる」
そして、こいつは言った。『兎は期日までに生き延びて、その時点で狼が死んでいたら合格』と、なら
「最後に一人になったら必然的に自分の願いがかなえられる」

そのためには他の兎は死んでいなければならない。
「そうすると、起きる事は一つですよ」
「けど、一番に狙われるのはたぶんお前だぜ？　生き延びてもチームが勝たないと意味ないしな」
「それでも兎側は仲良くチームプレイって訳には行かないですよ。最後には殺しあうんですから」
そうなっただけでも随分楽だ。
「なるほど、馬鹿って訳じゃないのか」
失礼な。
「わりぃわりぃ、そんな顔すんなよ。特典だけど何がいい？」
「僕のポイントがどれだけあって、どんな得点があるか分からないと決められないです」
「それもそうか」
そう聞こえた瞬間に、また僕の目の前に文字が浮かぶ。

所持ポイント　１４３００

無限の剣製　２３０００Ｐ
直視の魔眼　３００００Ｐ
ｅｔｃ．

所持ポイントの下には能力とポイントがずらりと並んでいる。
「ポイントって大体どのくらいが普通なの？」
なんか３００００とか普通にあるんだけど
「普通は６０００程度だな、今回はポイント高めの奴らを選んだけど」
ということは少なくとも６０００は皆持ってるわけか。
「選ぶのに時間がかかっても良いぞ。なんせ自分の命がかかってる

んだからな」
言われなくても。
そういう前にふと、ある文字が目に止まった
『四神の書』　１４０００Ｐ
「これってどんなの？」
「ん？　あぁ、夜天の書のパチモンだな」
「守護騎士システムもあるのか？」
「あるぞ」
「防御プログラムは？」
「ないな」
「なら、これで」
そう言うと神は驚いた様な声をあげた。
「いいのか？　他にも色々あるしそもそもお前、最後まで見てないだろ？」
確かに、自分の命がかかっているのに即決する奴はただの馬鹿だ。
けど、
「いいんですよ、これで。それよりも３００以下のやつってないんですか？」
僕はその疑問を一で切り捨てた。
「……まぁいいか。後、３００以下はねぇよ。最低でも５００だ」
「わかりました」
「次はデバイスな、どんなのがいい？」
「ストレージで」
「はい決まり。これでやること終わったけど、何か質問あるか？」
「いいんですか？　そんなことして」
「他の奴がうるさくてな、多少情報を与えちまってな。とりあえず全員一つだけ答える」
質問ねぇ……

「なら、あなたはどうしてこんなことしてるんです？」
「そんなことでいいのか？」
「このままほっといたら気になって仕方ないですよ」
他に聞きたいことが無いって言うのもあるけど
「やることが無くてな、昔一回やってみたら案外面白かったんで、たまにやってるだけだ」
「つまり暇つぶしというわけですか」
「不愉快か？」
「まぁ、ね」
これで不愉快にならない人がいるんだろうか？
「残念ながら運が悪かったと諦めて俺の暇つぶしに付き合ってもらうぜ」
「それは別に良いですよ」
「そうかい？　なら始めるぜ」

ＧＡＭＥ　ＳＴＡＲＴ

プロローグ　簡単なルール説明（後書き）

四神の書はどこかでかぶっているかも、かぶってたら修正します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9331v/

魔法少女リリカルなのは　神様による狼と兎の遊び

2011年8月19日16時25分発行